

平成29年度第4回千葉県県民活動推進懇談会 開催結果概要

- 1 日 時 平成30年3月16日（金） 午前10時～12時
- 2 場 所 千葉市ビジネス支援センター（きぼ一る） 13階会議室3
- 3 出席者 鎌田委員（座長）、牧野委員（副座長）、渡辺委員、奥野委員、文入委員、
小松委員、細矢委員 ※以上7名
- 4 議事の概要

【議題1】千葉県県民活動推進計画 平成29年度実施事業の実施結果(案)について

事務局説明

資料1により説明。

質疑応答

鎌田座長 ご説明いただきましたが、ご質問ご意見等お願いいたします。

牧野委員 10ページの「協働によるコミュニティづくりの普及・促進」の中で、県内いろいろなところで、行政からの開催希望、またそのテーマ、それぞれに沿ったような形で企画していただいて、協働によるコミュニティづくりといってもテーマを分解するとこれだけ出てくるのだと思う。企画・運営をはじめとして石井さんは大変だったと思う。現地の受入れ先の組織、また手を挙げた市町村にとっては、県の後押しがあって開催していただいた。私が中間支援として担当した富里市では「寄附による地域資源の循環を学ぼう」ということで、「ちい寄附」という乾杯チャリティーのようなことを市が始めたばかりだったので、県の方から講師を派遣していただいて皆で共有する機会となり、地域にとっても大変有意義な研修会であったのではないかなと思う。とにかく、それぞれの市町村でこれだけの企画を回し、参加を得ていくのは本当に大変なことだったのではないかなと思う。

鎌田座長 私も同事業の「ちばコラボ大賞から学ぶこれからの地域づくり」をテーマに八街市で58名の参加者を得て開催されたイベントに関わらせていただいた。コラボ大賞は受賞だけではなくて、受賞後に、どのように成長し様々な困難を越えてきたかということ、また、コラボ大賞は元々どういうところから始まったのかということ掘り下げて活発な質疑もあり、大変良い企画だったかなと思う。八街市では昨年7月にまちづくり条例を作ったばかりで、どうやってこれを成果のあるものに回していくか、市側のタイミングからもちょうど良い時期で、とても良い企画だったかなと思う。

【議題2】千葉県県民活動推進計画（平成30年度～32年度）最終案について

事務局説明

資料2、3により説明。

質疑応答

鎌田座長 ご説明いただきましたが、全体的な印象やこれからの活用などのご質問ご意見等お願いいたします。

奥野委員 資料を前もって送っていただいたので、前計画と見比べてみた。基本的な計画や考え方が受け継がれている。一つお聞きしたいが、27ページ「行動計画の成果を表す指標」の「市民活動団体の活動へ参加している人の割合」については、現状・目標とも3年前に比べて数字が上がっていたが、「寄附を受けたことがあるNPO法人の割合」については、3年前に比べ現状・目標とも数字を下げている。それについて良い悪いというわけではないが、お聞きしたいのは、民が民を支える仕組み・構築モデル事業で、もう5、6年前になるが私の所属しているACOBでも東葛地域の我孫子、柏、松戸を対象として、県からの事業を一部受け、一般県民・NPO・企業のマッチング会を3市で開催したり、企業に寄附についてのアンケート調査などをした際のことを思い出し、非常にこの「民が民を支える仕組み」をつくるのは難しいなと感じた。特に寄附を通じて市民活動を支援するという事は難しい。「公益財団法人ちばのWA地域づくり基金」も継続していて立派だと思うが、一般によく「日本の寄附文化が進んでいない」といわれる。クラウドファンディングやふるさと納税に対する反応は違うと思うが、「寄附文化」はやはり進んでいない。この表をみると、進んでいないのが顕著に表れている気がした。牧野委員に現状がどうなっているのか教えていただきたい。

牧野委員 「新しい公共支援事業」のときに、奥野委員のACOBと一緒にこの「民が民を支える仕組みづくり」を県内各地で展開して、その中から作り上げてきたのが、「公益財団法人ちばのWA地域づくり基金」で5年目になる。その中で、クラウドファンディングの拡がり、ウェブ管理をしている団体、例えばcampfireやReadyforなどがいろんな形でウェブを通じて、寄附をする部分はどんどん広がっている。しかし、少し心配な部分もあって、いろんな方々と話をする中で見えてきたこととして、本当に寄附を集めてやるべき活動なのかというものまでもが、寄附を募集して集まっている。そのことを今後どのように考えれば良いのかということも含めて、公益的な分野だけではない寄附の集め方もたくさん出てきている。それはそれで良いことかもしれないが、市民活動の文脈で対面の寄附を集めるということ、つまり「地域に貢献したい、どうにかしたい」という思いを集めていくということがなかなか進まない。ただ、やはり5年後10年後にはそうした「動きや思い」が効いてくるだろうと思っている。ちばのWAも先日理事会があったがなかなか寄附額は伸びていない。ただ、直近の2、3年の中で

うというよりも、10年後、20年後に「民が民を支える」というのは必須の条件になるわけだから、そこを目指して進めていかなければいけないことかなと思う。順調に寄附文化が育っているとはまだまだ言い切れないという現状は、奥野委員のおっしゃる通りで、10年後、20年後に向けてというところでもっと練り直して呼びかけていきたいと思う。

事務局

成果目標は寄附を受けたNPO法人の割合ということで、目標値を60%と出していますが、ほかの成果指標と同様に28年度時点を踏まえての目標値になっています。今年度の推移もみながら、改めて考えていく余地はあるのかなというのがあります。寄附文化の醸成については、寄附をテーマにしたセミナーを昨年度12月に千葉市で、今年度に富里市でそれぞれ行っていますが、そういったところから少しずつ始めていく。まずは、市町村の皆さんにそういう「民が民を支える」枠組みがあって、うねりがあることを示していきたい。また、間接参加である寄附では、より間接的なウェブでの関わり方と直接の実活動があり、その中でファンを増やしてどのように取組を進めていくのかという部分がある。活動に係るファンの部分と言いますか、活動に関係するような人たちの裾野をいかに広げていくのか、そういった観点。先ほどのガバメントクラウドファンディングもあります。より多くの行政・市民活動団体の方に、そういった観点があることを伝えられるようなこと、セミナー以外のものできればいいなと思いつつお話をうかがっておりました。まずは、そういった観点のもとで新計画に基づいて、この本も使いながらPRしていきたいと考えております。

小松委員

私も「民が民を…」について気になっていて、ずっと昔、牧野委員たちと三重県や新潟県や兵庫県に行ったりした。そのときの私の観点は、企業にとっては、利益を出しているから気軽に寄附を出せるということではない中で、どうやって関われるのかという点だった。現在も難しいポイントと感じている。

現在、私の所属する会社でも、目には見えないが、様々な分野で公益活動への関わりを始めている。

地域と企業の関わりについて、今後期待したいことは、寄附もそうだが、オリパラを契機として企業やその社員がどうやって関わっていけるのかという考えや動きの広まり。まだ始まったばかりだが、パラを契機として経済6団体が「みんなで応援ちば」というのを作った。取組の例として、松戸や我孫子やそれから南の方も含めて、商工会議所・商工会が地域でパラを盛上げるイベントをするときに、企業としてどう関わっていこうかという取組を始めている。幅は広くないかもしれないが、パラなので障害や福祉等の分野で、支え合いやその機運を企業がどう関わってレガシーとして残していけるのかというチャレンジである。私の方もオリパラで関わっているのだから、それらがレガシーで残るようにウォッチして

いくとともに、きっかけがあれば県民活動の推進にも絡めていければと思っている。

パブコメへのフォローも含めて、共有や確認したいことがある。全て修正への意見ではない。この計画の伝え方で参考になると良いと思う。

まず、計画全体について。施策・考え方・事例・データがたくさん載っていて、テキストとして使えると正直本当にそう思っている。印刷の質を下げてでも、なるべく全部印刷したほうが良いと感じた。資料編があって前がより生きてくる。

次にパブコメについて。パブコメ①の「取組や関わる主体を狭める印象を避けるべき」という意見への対応について、3ページに記載を補足していただいた。また、別の部分、6ページのもともとの記述に「地域を担う主体」の中に行政を加えた記載がある。事務局説明では、県民活動の担い手では活動の場づくりを担う行政をあえて外し、地域を担う主体では行政が入っているということだった。そうした整理のもと記載を分けていることを県として共有していれば良いと思う。

次にパブコメ⑦の「目指す千葉県の姿」への「主体的に担う感覚が弱い印象がある」という意見への対応について。主体性については様々な記述がある。目指す県の姿は「県民活動に参加して地域のみんなで創る」だから、「参加」がいわゆる参加で、「みんなで創る」が主体的なもの個人的には強く思っていた。さらに、その下の文章でフォローしている。加えて、資料編のイメージ図も「みんなで創る」ということを表している図だと思う。そのため、「主体というのは広い」、「主体的に担っていく」ということを認識した記載であり、そうした位置づけであることを示していけると良いのでは。

それからパブコメ⑧の「県民活動を通じて…水準向上を…」について、これはまさにA3のイメージ図だと思う。いろんな主体が関わりながら右上に向かっていくことがレベルアップを図っていくことを示しているので、この図ではそれも示されていることを伝えていければ良いのではと思う。それから、42ページのコラムはまさに水準を向上していくことの説明となっている。42ページの図は立体的なので見せ方が難しいという課題もあるが、A3のイメージ図と42ページで水準向上をきちんと表していることをどこかに表記しておいても良いし、今後伝えていく上で踏まえていければ良いかなと。

ほか、感想と細かいところだが、ページ順にいくと、2ページの上から5行目の「人と人とのつながりが大きなレガシー」について、本当にこの計画の基幹であるし、今後創っていくことなので、この言葉は重いと個人的には受け止めている。今、自分がやっているオリパラの活動の中でも意識してやっていきたいと思った。

資料編の活動事例について、34ページに「ちばおもてなし隊の実施」とある。先日、千葉大学を会場としたイベントに私も参加してきた。とても良い取組と思う。「2020おもてなし隊」なので、たぶん2020年までの活動かなと推察するが、鎌田座長のところも含め、県内では実際に大学生とか高校生が活動を進めチャレンジしている取組が様々にある。その取組や成果が、2020大会が終わっても続いていくようなことがとても大事だなと様々な機会に感じている。様々な業務でオリパラに関わっている中で、県でも千葉市でも、教育の分野も含めて、そのことをしっかり示していきたいと考えている。千葉市は教育の中できちんと残していくようである。県では、各市町村とつながりがあるので、それを活かすことも大切だと思う。

資料編の各種の調査結果の中で56ページについて、先ほどの事務局説明でボランティアや寄附の調査が間に合った、ただ、サンプル数が少ないことが懸念される説明があった。サンプル数についての考え方としては、傾向・ポイントを抑えていくということが説明できれば良いと思う。例えば、ある設問でAの回答とBの回答を比べ、その差が何%というような記述・分析ではサンプル数が少ないために誤差が大きく「それは本当なのか」となる。現在の記述のように、「Aの回答が目立っています」といった記述で傾向やポイントを抑えていく分には誤差は関係ないので、そうした伝え方が出来ればと思う。

データについて、62ページを見てちょっと愕然とするのが、香取、海匠、長生、山武、夷隅、君津、安房もそうだが、やはりこういったところで活動が少ないんだなと。人口も少ないために市民公益活動団体の数も少ないのだろうが、地域づくりにおいて一番困っている過疎の地域でもある。牧野委員をはじめとして上手く支援して引き上げて、広域で展開していると話を聞くが、こうした地域を今後どうするのかと本当に感じる。ただ一方で、東葛地域などでは人口も多いが、コミュニティをこれからどう支えていくのが本当に大事な地域と感じている。

最後に、各グラフを色分けしていただいて非常にわかりやすいと思う。

以上、修正ではなく、パブコメへの回答や質問があった際の理論的な裏付けとして、自分が思っていることを申し上げた。

鎌田座長 42ページの図についての工夫として、色で奥を目立つようにするというのは可能なのか。白黒だとしたら、奥を目立たせるのは大きさ・形で調節するしかないのかなど、いろいろ考えられる。

牧野委員 誤字を見つけた。48ページのプロボノチャレンジ松戸のところ、文章の一番下の「地域での活躍の場と貴会を創出し」は「貴」ではなく「機」かと。

また、42ページの図について、A3のイメージ図があるので、この図はいら

ないような気がする。

文入委員 質問だが、先ほど牧野委員がおっしゃった民が民を支える寄附文化について。こういうものには寄附というのは良いのかどうかという懸念、そこまでの表現はなさっていなかったが、寄附文化というか、寄附とは何かという部分を考えることが重要という趣旨のご意見かなと思った。例えば、明らかに公益的なもの、それから市内等でも多くの人たちに影響を与える、あるいは利益を得るような、精神的にも身体的にも、そのような活動に対する寄附というのは非常に大歓迎ですが、最近の動向として懸念があるものも見受けられるという趣旨の御意見をおっしゃったのかなと思ったので。詳しくお聞きしたいのですが。

牧野委員 NPOや公益的な活動に寄附を集めて、立ち上げていくとか発展させていくことはもちろんどんどん進めなければいけないと思うし、コミュニティビジネスやソーシャルビジネスという分野でも、最初の運営資金は必要なので、公益的な事業・活動に対しては寄附をどんどん集めていかなければとは思っている。一方で、WEBを見ていると、これは自分のお金でやるべき事例もあるということを考えている。それと、少し論点が違うかもしれないが、NPO法人日本ファンデレイジング協会が発行した「寄附白書2017」が出て、今年からふるさと納税についても返礼品を返さない分については寄附白書の中の寄附でカウントされるようになった。これまでは、行政が集める寄附というのは寄附じゃないと捉え、民が民を支えるという観点で寄附を捉えていたのだが、そのように変わった。ふるさと納税が寄附なのかどうか。例えば、調べていただいたのだが、富里市の人が宮崎牛の返礼品をもらうために、自分の住んでいる富里市への寄附よりもよそに出ている寄附の方が多い。それはどういうことなのか。返礼品のことは国の方でも問題になっているが、もっと議論する必要がある。税制優遇によって、よその市に寄附をして自分の所得税・住民税は低くなるわけで、寄附という観点では凄く微妙なことかな、というように改めて寄附については議論をしているところ。これは全国的にもNPO側というか、中間支援の連携の中では議論になっている。「民が民を支える」の現状を示す寄附白書がふるさと納税の寄附額も加味された報告書になっている。もっと議論する必要がある。私自身は、区別すべきものと考えている。

文入委員 先ほどの42ページの図について、やはり面白さ・インパクトがあるので、見え方の工夫をすれば良いと思う。ぜひ残してほしい。こういうインパクトのある図、「これは何だろう」って思えたり考えるきっかけとなるような図はなかなかないので、いいかなと思う。

鎌田座長 やはり、「イメージ図」のように、見て考える機会というのは重要なもの。行政の推進計画の中で行政の理念だけに乗っけるのではなく、こうした図を載せ

ることで思いを持つ人たちが図などを見て、刺激を受ける、励まされるというところは非常に重要なかなと思う。こうやって図を載せられる場面は、行政の推進計画だとあまり作り得ないかなという気がする。あと、いろいろなところにコラム欄がある。県民活動を巡る議論では、どこの部分が事実でどこの部分が解釈でと、様々なところがあるが、ある程度そういう様な「〜〜が重要と思われる」というようなところでコラムをうまく活用されて、全体像が伝わるようにしている。そうすると、特にこの資料編を使う人の打ち方次第でいろんなものが響いて反ってくる。そういうつくりは大変素晴らしいかなと思う。我々のようなデータを使うところでも色々分析していけば面白そうなところもあるし、いろいろな出典が丁寧に書かれている、キーワードが書かれているという点も非常に誠実に出来上がって、石井さんを中心に課を挙げて勉強されて、しかもそれを1つにまとめている。課外からもご意見があるかもしれないが、結果的にまとめて世に出るのは大変素晴らしいと思う。ぜひこれを県民の皆さんがどう活用できるか、引き続きいっしょに勉強していければいいかなと思う。

【議題3】千葉県県民活動推進計画 平成30年度実施事業(案)の概要について

事務局説明

資料4により説明。

質疑応答

鎌田座長

ご説明いただきましたが、ご質問ご意見等お願いいたします。

奥野委員

「地域コミュニティを支える人材づくり」について、次世代ボランティアはもちろん本当に力を入れていただきたいが、元気な高齢者も地域の重要な担い手。NPOにとって一番問題になっているのは、74ページにあるように高齢化や担い手不足だが、厚労省が最近よく「元気でいつまでも長生きでいければ、外に出て人に会いなさい。ボランティアがおすすめです」と言っている。そういったことも踏まえて、やはり元気な高齢者もボランティアに気兼ねなく参加できるような工夫をしていただければと思った。意外と活動したい人はいるのだが、若者と一緒にやることに不安を感じたり、ついていけるかなと思ったりと色々あると思う。それはそれで役割だったり持ち場を配慮していただければと思っている。

鎌田座長

34番とか19番とか、大学が絡む部分も多いと思うが、大学の方も特にオリパラということで試験期間を大会期間からずらしたりする。試験期間をずらすのは結構大変である。開催地やその近県の学生たちは特にパラリンピックへの理解を深めようという取組があるし、機会とする必要がある。準備の段階から関わる場をつくったり戦略的に進めることが重要なので、都市ボランティアの運営募集などに当たっては、各大学の状況も若干違う中、それを踏まえた取

事務局

組が大事かなと思う。また、石井さんも見に来てくれているが、地方創生の中でCOC+という、大学全体と地域で取り組む事業もやっているの、そういう時にちょっと出てきていただいてご説明いただいたりすると、大学と地域全体に話が伝わるし、良い機会になると思うのでご活用いただければと思う。

今回の県民活動推進計画は人づくりから始まり、組織への発展や個と組織との関わりもありながら、地域づくりに向けて一つのストーリーで書いている。

COC+についてもそれを推進するものの一つとして記載した。昨年度セミナーで取り扱ったりしましたが、適宜情報収集しながら県庁の中で地域づくりに関わりのある総合企画部ですとか、そういったところとも情報共有を進めながら取り組んでいきたいなと思ったところです。

裾野の拡大に向けてということで、奥野委員からの若者だけではないという御意見。昨年度、退職者向けの簡単なリーフレットを作成したりした。最近そこからまた一歩踏み込んだ取組があり、例えば、松戸でのプロボノもあります。様々な取組があることを広めていくことは改めて重要だなと思いました。

計画期間では、オリンピック・パラリンピック注目が集まりますが、それだけではなく当課の本来もともと行っていた事業についても決してトーンダウンすることなくやっていければと考えております。

計画については、本来事業・オリパラそれぞれバランスをとって書くことができたかなと思っております。

鎌田座長をはじめとして、委員の皆様には大変お世話になりまして、改めて感謝申し上げます。